

24 美濃天目茶碗

美濃焼／江戸時代 17世紀
口径11.4cm／一木順様寄贈 14-Ha-206

日本にもたらされた天目茶碗は、禅宗寺院の茶礼(飲茶の礼法)に欠かせないものとなり、やがて本器のような日本産の天目茶碗が製作されるようになった。本器は高台内の朱書銘に「瑞源」とあり、京都・大徳寺の塔頭であった瑞源院で用いられたものと思われる。

25 金欄手花鳥図碗 「錦光山」銘

明治～大正時代 19-20世紀／口径12.1cm
安武正作様寄贈 14-Ha-201

高台内に「錦光山造」の銘があり、明治・大正期に薩摩焼の金欄手の制作技法を継ぎ、欧米向けの器として発展させた京都の陶工・錦光山宗兵衛の作と伝える。器の内外に描き込まれた花鳥の絵柄の細密さには、ただ息を飲むばかりである。

26 鉄絵牡丹唐草文水柱 (ケンディ)

シーサッチャナーライ窯／タイ 15-16世紀
高さ13.6cm／本多コレクション 17-Ha-157

ケンディとは、主に東南アジアで用いられた飲水器のこと。注口を乳房形にすることで、細い水の線が弧を描いて勢いよく出てくる。注口に自分の口をつけなくとも水を飲むことができ、衛生的で、回し飲みにも適している。

27 染付山水文水注 (ケンディ)

有田焼／高さ22.3cm／江戸時代 17-18世紀
一般購入資料 14-Ha-6

ケンディは中国と日本でも製作され、東南アジアやヨーロッパへも輸出された。日本での生産を担ったのが有田焼で、本器はその一例。頸は長く、胴は球状に近づき、注口は小さくなつて肩に付着している。実用性を離れ、形式化が顕著である。

28 灰釉手付水注

上野焼／高さ13.5cm／江戸時代 17世紀
田中丸コレクション(福岡市美術館へ寄託)

素朴な器形、一部にまだらな白濁を生じた釉調など、いかにも日用の器と見える。しかし注口と把手の稚拙な作りには、あえて素朴さを強調しようとする作意を感じられまいか。最初から侘びの美意識に適う茶の湯の器として作られた可能性が高い。

29 色絵梅樹文手付水注

有田焼・柿右衛門様式／江戸時代 17世紀
長さ8.5／安武正作様寄贈 14-Ha-193

ヨーロッパの人々を魅了した柿右衛門様式の器には、現地の求めに応じて様々な器種が作られた。本器は、いわゆるティー・ポットである。さぞ人気があったのだろう、多くの現存例が知られている。どれだけ実用に供したかは定かではない。

ふくそう 副葬された器—めいき 明器のいろいろ

30 青磁神亭壺

古越磁／中国・三国～西晋時代 3世紀
高さ47.5cm／森田コレクション 20-Ha-69

墳墓に副葬したり神聖な場所に供えるために作られた器を、明器と呼ぶ。中国では古くより埋葬用の明器が発達し、被葬者が生前に過ごした生活環境を再現したような家屋や調度などの模型や、鎮魂あるいは墓を守護するための様々な造形物が生み出された。完成してすぐ墓室に納めるため、土に埋没しない限り、保存状態が良好であるものが多い。神亭壺と呼ばれる本器は、壺形の上部に楼閣がそびえ、周囲に胡人(西方の人物のこと。尖った帽子をかぶっている)、騎馬人物、鳥獣などがひしめく。全て一体として固着されていて、壺本来の貯蔵機能は完全に失われている。中国では「魂瓶」と呼ばれ、被葬者の魂を宿すために制作、副葬されたものという説もある。

31 青磁天鷲壺

中国・南北朝時代 5-6世紀
高さ28.1cm／森田コレクション 20-Ha-76

肩に鶲の頭を象った注口と把手を取り付けたこのような器は、中国4～6世紀に浙江省を中心とする地域で墳墓に副葬する明器として焼かれた。本器も含めて殆どの遺例は、注口の孔が内部に貫通していない。肩の両側に付く二つの「耳」も形式化が顕著である。

32 三彩四耳小壺

中国・唐時代 8世紀／高さ5.0cm
森田コレクション 20-Ha-88

33 三彩鳳首瓶

中国・唐時代 8世紀／高さ33.0cm
松永コレクション 6-Ha-128

いわゆる唐三彩の遺物は、主に唐時代の都であった長安・洛陽の貴族の墓から出土する。当時の貴族たちはこぞって豪華な葬礼を行い、唐三彩はその副葬品として大量に焼かれた。No32のようなミニチュアも多く、需要の高まりと葬礼の形式化を物語っている。

つか うつわ み うつわ
使う器／見る器

会期 2019年12月3日(火)-2020年2月2日(日)

会場 古美術企画展示室



3 鉄絵魚文壺



8 五彩魚藻文壺 (重要文化財)
※展示期間:12月17日(火)～2月2日(日)

壺、瓶、蓋物といった容器から、鉢、碗、水注などの食器にいたるまで、器といふ器は、日々の暮らしのために「使う」ものです。その実用性に、「見る」対象としての装飾的、象徴的要素が加わり、それが極端に強まることで、見ることのみを目的とした器や儀礼的な器が作られるようになりました。

美術館の収蔵庫に収められている器物は、美術とされるだけあって、「使う」よりも「見る」要素が多いようです。一方「使う」要素の強いものといえば茶の湯の器が好例ですが、当初からそのために作られたものにしろ、他の器を転用したものにしろ、ただ使うに終始するのではなく、素地、釉薬、細部の造形など、「使う」なかで「見えてくる」魅力が、その器の価値を高める場合があります。そのようにして身についた価値観をもって過去の器を捉えなおせば、たあい生活の器が、類まれなる美術品となって現前することもあり得るわけです。

本展ではそうした奥深さにアプローチすべく、器種ごとに古今の様々な陶磁器をならべ、ひたすらに一つ一つの器に託された（であろう）本来の機能に着目します。とはいえ、もとより使うものだったのか？見るものだったのか？そのどちらでもないのか？どちらかというと、どちらだったのか？…実際よく分からぬことが多いのが実情です。その場合は観察を通じて、器を作った人、使った人、見た人の気持ちになって、あれこれ勝手に想像してみます。そんな学芸員の独り言を踏み台にして、「使う」と「見る」、一つの一つの器における両者の主従、境界、過程を見つめ、美術としての器が放つ魅力の正体に少しでも近づく一助になれば幸いです。

[学芸員 後藤 恒]



福岡市美術館

FUKUOKA ART MUSEUM

〒810-0051 福岡市中央区大濠公園1-6
TEL 092-714-6051(代表) FAX 092-714-6071
www.fukuoka-art-museum.jp

出品作品リスト・解説

※ 記載の順序は、出品番号、作品名、産地または作者名（不明の場合は省略）、時代または国名、世紀、サイズ、コレクション名、所蔵番号、作品解説としました。
※ 出品番号は展示の順序とは必ずしも一致しません。
※ 作品解説は全てに付しているわけではありません。

貯蔵、保存するための器—壺／瓶／蓋物

1 ハンネラ蓋付壺

タイ 16-17世紀／総高17.7cm
本多コレクション 17-Ha-695

2 ハンネラ壺

タイ 16-17世紀／高さ14.0cm
本多コレクション 17-Ha-696

水や食材を貯えたり、煮炊きをしたりと様々な用途をもつ土器。今も東南アジア各地で作られる。江戸時代に南蛮貿易船で日本に伝わると、水指や建水などの茶道具に転用された。ハンネラという呼称は、一説に、軟質であることを表す「半練」に由来するともいう。軟質ゆえに水を入れると少しづつしみ出してしまうが、表面で蒸発する際に気化熱が奪われることで、水が比較的冷たく保たれる。表面の叩き文は装飾効果もあるが、手に取って持ち歩く際の滑り止めにも効果的である。

3 鉄絵魚文壺

スコータイ窯／タイ 14-15世紀／高さ15.9cm
本多コレクション 17-Ha-87

ひっくり返った魚が連なる様子は、死んだ魚の群れのようである。しかし、この壺を真上から見ると、どうであろうか。口の円に沿って、ぐるりと列をなして生き生きと泳ぐ魚たちの姿が見えてくる。この絵付けをした工人は、きっと口の円を手前に向けて、真上からの視点で筆を走らせたはずである。この壺の用途を詳らかにすることは出来ないが、少なくとも真上から見るもの、つまり地べたに置くものであったのではないかろうか。

4 青磁四耳壺

中国・唐時代 7世紀／高さ19.6cm
森田コレクション 20-Ha-87

肩に付く四つの耳は、口に被せる蓋を紐で押さえて括りつけるためのもの。本器のように耳と口縁が同じ高さであれば、被せ蓋ではなく棧蓋だったのだろう。あるいは何らかの儀礼用器として形式化したものかもしれない。

5 黒褐釉唾壺

中国・唐～五代十国時代 9-10世紀／高さ11.9cm
森田コレクション 20-Ha-104

唾液や痰を吐き捨てるための器。片手で握りやすい胴部、広く開いた口など、いかにも高貴な人々の日常生活に資した器である。それだけに明器（墳墓に副葬する器）など形式化した遺例が多い中で、本器は自然な作行で、実用性が感じられる。

6 黒褐釉櫛目文壺

カンボジアまたはタイ 12-13世紀／高さ59.7cm
一般購入資料 14-Ha-207

9～15世紀にかけてインドシナ半島に君臨したアンコール王朝、その最盛期に量産された壺。数ある遺例の中でも本器は大振りで保存状態も良好である。内部の底の部分に釉薬が掛けられていることから、実際に液体を入れる器であったと想像される。

7 色絵花文大壺

※展示期間：12月3日(火)～12月15日(日)
江戸時代 17世紀／高さ41.0cm
一般購入資料 14-Ha-32

柿右衛門様式初期の代表的作品。このように華やかな見栄えの色絵磁器は、オランダ東インド会社を通じてヨーロッパに輸出され、生活の器としてだけではなく、室内に飾る品として富裕層に愛好された。

8 [重要文化財] 五彩魚藻文壺

※展示期間：12月17日(火)～2月2日(日)
中国・明時代 嘉靖年間 (1522-1566)
高さ33.8cm／松永コレクション 6-Ha-139

中国色絵磁器生産の最盛期に、景德镇の官窯で制作された壺。どの角度から見ても躍動的に泳ぐ鯉の姿が見えてくる。まるでガラス製の金魚鉢のようだ。まだ当時はそのような器はなかったはずだが、側面観による水中空間のイメージを巧みに表現している。

9 黒絵式アンフォラ

ギリシア 紀元前6世紀／高さ42.3cm
松永コレクション 6-Ha-159

アンフォラは古代ギリシア時代より生産された器で、二つの大きな把手と、長くのびる頸が特徴。本来は材料を運搬、保存する容器であったが、前7世紀頃より本器のように装飾的な器が生まれた。これらは賞与の品、副葬品など、儀礼的目的で制作されたと考えられている。

10 白磁龍耳瓶

中国・唐時代 7世紀／高37.2cm
松永コレクション 6-Ha-127

大きな把手を備えるこの器形はアンフォラに起源するという。把手は龍の形をなし、口に噛みついている。龍の頭が邪魔をして、口から内容物を出し入れするのは困難だ。実用性に乏しいこの手の器は、明器（墓に副葬する器）であったという説もある。

11 黒釉人面文瓶

カンボジア 11-12世紀／高さ29.2cm
本多コレクション 17-Ha-28

瓢形の器形を人体に見立て、上部に人面、下部に両腕を表す。同手の器の多くは最上部の首から上が割り離された状態で出土し、身代わり人形のような、何らかの儀式的用途を示唆している。本器は最上部が残された稀少な遺例。

12 青磁象嵌菊花柳文梅瓶

高麗時代 14世紀／高さ32.2cm
松永コレクション 6-Ha-149

梅瓶という呼称の由来は、口の小さな器を「梅の瘦骨（やせていること）」と呼んだことによるという。酒などの液体を保存する容器であったとされる。中国の景德鎮窯で盛んに生産され、朝鮮半島にも伝わり、本器のような青磁の優品が生まれた。

13 黒釉長頸瓶

磁州窯／中国・金時代 12-13世紀
高さ24.5cm／松永コレクション 6-Ha-135

肩を強く張り、頸は高く伸び、口をラッパのように広げている。中に液体を注ぎ入れるには都合が良いが、外に注ぎ出すには肩が張りすぎ、口も開き過ぎている。見るからに花器に相応しい形といえる。もとの用途ははっきりしないが、本器は日本に伝わると茶の湯の花入として活用された。

14 白磁卯花燭細工瓶

出石焼／明治時代 19世紀／高さ33.8cm
森山コレクション 11-Ha-14

明治時代に巧緻な器を生産した兵庫の出石焼の花瓶。胴の前後に窓を設け、内部には細工により籠に咲く花が見事に造形されている。どうなっているのかとさらに覗き込みたくなる。口から内部へは花の茎を入れる空間がしっかりと作られ、実用性が確保されている。もっとも実用したとて、主役となる生花よりも目を引き付けてしまいそうである。

15 青磁蓋付碗

耀州窯／中国・北宋～金時代 11-12世紀
高さ11.4cm／森田コレクション 20-Ha-113

蓋の裏に「燉煌」の墨書銘があり、蓋と身の接合部には石灰のような白い付着物が残っている。封をした痕跡なのであろうか。中国と西域をつなぐ要衝の地・敦煌へ輸送する貴重品を入れたか、あるいは敦煌莫高窟へ奉納したか…想像は膨らむ。

16 青磁刻花蓮弁文酒会壺

ベトナム 13-14世紀／高さ15.5cm
本多コレクション 17-Ha-319

酒会壺とは、読んで字のごとく酒を貯めておく蓋付きの器。飲酒する時に蓋を開け、飲む分だけ柄杓などで注いだのであろう。中国南宋～元時代、13～14世紀に多く、ほぼ同時代のベトナムでも生産された。本器は酒会壺の中ではかなり小ぶりである。

17 色絵花鳥文大蓋物

有田焼・柿右衛門様式／江戸時代 17世紀
高さ37.5cm／一般購入資料 14-Ha-92

清澄で優美な絵付けに目を奪われる。蓋を必要以上に甲高に作るのは、身の輪郭との調和を考えたか、あるいは絵付けの面積を広くとる為であったか。底に残る貼紙から、本器はイギリスのウィンザー城の室内に飾り付けられていたことが分かる。

飲食のための器—鉢／碗／水注

18 白磁鉢

中国・唐時代 9世紀／口径15.0cm
森田コレクション 20-Ha-100

口縁を玉縁状に作り、高台は浅い蛇の目状に削り込んでいる。いかにも安定がよく手に取りやすいこの器は、定窯（河北省曲陽県）や邢州窯（河北省邢台内邱県）をはじめ膨大な出土例があり、晚唐期（9世紀）における日用的な鉢の典型である。

19 粉青沙器印花連珠文鉢

朝鮮王朝時代 15世紀／口径19.0cm
一般購入資料 14-Ha-22

朝鮮王朝時代に生まれた白土象嵌の鉢の中でも、最も上等とされた器である。見込みに「昌寧」、胴に「長興庫」と記しており、慶尚道昌寧県で焼かれ、長興庫（官庁のこと）に納められた鉢と分かる。こうした器は、賓客の接待などに使われたともいわれている。

20 色絵寿字文鉢

有田焼／江戸時代 17-18世紀
口径22.3cm／平岡重子様寄贈 14-Ha-166

「寿」の字を意匠にした色絵磁器の例は有田焼製品でよく見られる。赤を基調とする厳かな装飾は、いかにもハレの席に相応しい高級食器の風格を与える。中でも本器のように金彩を用いて丁寧に仕上げられた作品は、大名家への献上品など、国内の富裕層の需要に応じるものであった。

21 備前大平鉢

備前焼／桃山時代 16世紀／口径42.7cm
松永コレクション 6-Ha-43

「大は小を兼ねる」というが、このように大きく口の立った鉢は、材料を一時的に貯めたり食事に使ったりと、何かと重宝されたようだ。見込には焼成時に他の器を重ねた跡があり、茶の湯ではこれを「牡丹餅」と呼んで見どころとした。

22 青磁刻花牡丹文大平鉢

龍泉窯／中国・元～明時代 14-15世紀
口径55.7cm／松永コレクション 6-Ha-138

中国の青磁を代表する龍泉窯（浙江省龍泉市）で数多焼かれ伝存する製品の中でも、本器は特に大ぶりで、発色も見事である。長い龍泉窯青磁の歴史の中で最も上質とされる時期のもので、多くは東南アジアや西アジアに輸出された。

23 琥珀蓋梅花文天目茶碗

吉州窯／中国・南宋時代 12-13世紀
口径11.7cm／森田コレクション 20-Ha-150

中国の宋時代、天目山（浙江省杭州市）の禅宗寺院で使われていた鉄釉の茶碗を、日本人留学僧たちが日本に持ち帰った。それらは天目茶碗と呼ばれ、小さな高台、口縁の下に括りがある形状を特徴とする。本器は見込みに型紙を用いた黒抜きの梅花文が配されている。